

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4292100031		
法人名	(有)弦観光		
事業所名	グループホーム 吉崎の郷		
所在地	長崎県吉崎市石田町筒城東触1840—3番地		
自己評価作成日	令和5年 1月 27日	評価結果市町村受理日	令和5年6月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内
訪問調査日	令和 5年 3月 29 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

施設では、小さな施設の強みを生かして、大きな施設ではできないことを特徴としています。具体的には、食事面でのご利用者様への聞き取りからメニューをたてたり、美容室や、買い物の支援、預貯金の引き出しなど、その都度の対応をしています。また、面会や外泊を中止するのではなく、どうしても可能かという視点から取り組んでいます。また、季節の行事として、おせち、恵方巻、花見、BBQ、うなぎ、お寿司など生ものや、アイスクリームなども基本的には全員に提供しています。地域とのつながりも重視し、地域の公民館行事には参加を心がけ、より良い関係が築けています。吉崎の介護業界の取り組みにも積極的に参加しており、吉崎島内の研究発表、介護人材の育成確保の取り組みや、将来の介護士の育成のために、小、中、高校への訪問する取り組みにも協力しています。コロナ禍でも施設間の横のつながりに働きかけ情報共有にも努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は空港の傍に立地し、空と海の間に延びる水平線や飛行機、広い敷地内の花々などが見渡せ、自然あふれる長閑な環境にある。利用者は同地域出身が多く顔見知りであり、地域住民とも頻繁に交流し、地元で溶け込んだ暮らしができています。小規模なホームの強みを生かして、リクエストメニューや買い物、“デートプラン”など個別支援に注力し、また、コロナ禍でもできる限りの対策を図り、島内を巡るドライブや花見、藤棚見学に出掛けている。地域の高齢者福祉の発展のため、管理者が行政と繋がり役職に就き活動している他、介護人材育成にも尽力している。元気な利用者が多く、家事仕事や草取り等我が家のように過ごせるよう、職員は一人ひとりの生きがいに繋がる毎日を支援している。代表の思いでもある利用者が“ゆったり、楽しく自由に、ありのまま”に暮らすことができる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印					
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目：23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができて (参考項目：9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と				
			2. 利用者の2/3くらいの				2. 家族の2/3くらいと				
			3. 利用者の1/3くらいの				3. 家族の1/3くらいと				
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない				
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目：18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目：2,20)	○	1. ほぼ毎日のように				
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度				
			3. たまにある				3. たまに				
			4. ほとんどない				4. ほとんどない				
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目：38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目：4)	○	1. 大いに増えている				
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている				
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない				
			4. ほとんどいない				4. 全くいない				
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目：36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目：11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が				
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない				
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目：49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない				
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目：30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が				
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない				
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目：28)	○	1. ほぼ全ての利用者が								
			2. 利用者の2/3くらいが								
			3. 利用者の1/3くらいが								
			4. ほとんどいない								

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念に沿って個別のケアに心がけ、出来ることを大切にしている。	理念3項目を職員で話し合い策定している。また、代表の開設当初からの言葉「ゆったり、楽しく自由に、ありのまま」も事業所内に掲示し、職員に浸透している。小さい事業所だからこそ出来るリクエストメニューや外出、買い物、“デートプラン”など個別支援に注力し、理念の具現化に努めている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域公民館の活動、青年会の活動、地域の体育行事などに職員が積極的に参加している。推進会や、避難訓練などで、ご利用者と、地域の人との交流もある。	自治会に加入し、管理者が公民館の総会や地区の草切等に参加している。専門学校生の実習受け入れ、総合避難訓練では老人会から参加があり、利用者と関わる機会も多い。近隣農家から購入した米などを使用する他、公民館館長が用務員として在籍するなど、地域と一体となっている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍もあり、なかなか交流は難しかったが、避難訓練などで、触れ合ったり、避難訓練の見学の受け入れを行ったり、外に開けた活動を今後も心がけていきたい。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会では、行事や、取り組み、事故の報告、身体拘束などお伝えし、いろいろな立場の方から意見を聞き、また、それを全体に報告する形で改善出来るところは、改善に努めている。	コロナ禍の為、年6回開催のうち2回は対面会議、他は全て書面会議で行っている。地域住民代表や行政等多数の構成メンバーにより、地域の情報や意見交換を行い、運営に活かしている。ただし、議事録に意見交換の記載が無く、書面会議では構成メンバーの明記や返信内容も確認できない。	メンバーからの意見やアイデアを反映するために、議事録に会議内であがった意見交換内容がわかるよう工夫する等、検討、取組が望まれる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の保険課とは、常に連携を取り、コロナ対応や、虐待の問題など話し合っている。GHとしても、施設運営で、加算や運営面での相談も聞いていただいている。	管理者は、県の“壱岐圏域介護人材育成確保対策地域連絡協議会”の副会長に就いている他、市の“あんしんネットワーク”で、行方不明者捜索等協力している。また、コロナ禍によるオンライン研修への参加やクラスター施設からの応援要請の連絡など、行政との協力関係を築いている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	拘束、虐待に関して、勉強会などを実施したりして共通理解をはかっている。現在身体拘束は行っておらず、今後も拘束はしない方向でケアしていきたい。	身体拘束適正化の指針を整備している。年4回職員会議内で、身体拘束適正化委員会を開き、全職員で検討、協議し、使用した資料と共に運営推進会議で報告している。年2回は内部研修も実施し、言葉の拘束など理解を深めている。毎月センサーマット使用経過を記録し、随時解除している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止法についても、勉強会でとりあげて定期的に実施している。昨年度経済的な虐待が予測される事例があり、対応をした経緯から、実際に良い経験になった。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活の自立支援については、毎日なるべく自分で出来ることをさがし、実施して頂いている。また、成年後見制度については、現在はご利用者はなく、身近に感じられないが、施設として受け入れないわけではなく、その都度対応していきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、直接お話をし、料金の改定もここ2年で実施した中で、ご家族様には説明、サインを頂く形で対応している。特に問題はなかった。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍になり、直接お会いする機会が減る中で、電話での要望などが主だった。受診や、面会、外泊に関することは、対応する機会が多かった。	苦情相談窓口や手順は明文化し、家族に説明している。コロナ禍で面会制限時は本人の健康状態や生活の様子を手紙で知らせ、電話やLINEも活用している。また、事業所の行事に家族を誘う他、運営推進会議議事録を返信の葉書を添えて送付するなど、家族の意見要望、提案を募っている。条件付きの面会の再開など反映事例がある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	副社長はよく相談にのってくれ、話も出来ている。今後、意見交換会や個人面談の実施も促していきたい。	代表や副社長は毎日訪れ、職員と交流を図っている他、職員は毎月の職員会議や日常業務の中で意見要望を伝えている。職員間のコミュニケーションは良く、事業所は働きやすい職場作りを目指している。手当の新設やコロナ検査キットの支給など職員意見の反映事例は多い。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	コロナの検査や、コロナ禍での往来の柔軟な対応、購入品の迅速な対応などしてくれている。ベースアップ、手当もあった。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修は島内は実施の経緯もあるが、島外の研修に関しては、コロナ禍で、積極的に実施はしなかった。今後もコロナの状況をふまえながら、検討していきたい。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍前は、他の施設に気軽に実習に行けたが、このような状況になり、お互いの施設の往来は極力控えた。現在は出来る範囲でリモートなどで連絡を取り、情報共有している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	お金の管理や、受診のお願い、美容室や、買い物、外泊の希望など、話をして頂く機会は多く、その都度対応出来る範囲で行えた。今後も個別に対応していきたい。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所される前は、家庭での行動に困られる話は聞かれたが、入所後は、受診の対応時に顔を合わせて話を聞く限りでは、大きな要望はなく、より良い関係が築けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所時に金銭に関する相談は2件ほどあった。結果として施設での管理を提案し、現在はいまよくいっている。また、現在は歯科の往診などはこちらで対応するという形でサービスをすすめている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活で、食事面や、掃除、洗濯などともに活動を行っている。また、見たいテレビ番組や、脳トレの本なども、一緒になって楽しむことが出来ている。職員が出たマラソン大会の映像なども、ご利用者様は見て楽しまれていた。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍でやり取りは減ったが、受診の対応に施設として看護師を導入し、病院での待ち合わせ受診という形が定着できた。受診時や、受診前の電話でもいろいろな話が聞けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	なじみの方が、面会というのは出来ない状況だったが、なじみの美容室などへは、現在も通うことが出来ており、とても良い関係が見られる。	コロナ禍前は親戚や友人たちの面会があったが、現在は家族のみに制限している。病院受診時に知り合いに会うことがあり喜んでいる。コロナ禍でも状況を見て、馴染みの美容院や法事、やしゃごを困んでの写真撮影に出掛けている。また、新聞を読んだり、読書をするなど生活習慣や趣味の継続の支援に努めている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず 利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努 めている	利用者同士の活動で、大きなシーツをたた むときなど協力してして頂いている。また野 菜切りも二人一組で行っており、話しながら、 笑いながら活動している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性 を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過を フォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も、街中で出会えば、気さく に話したり出来る関係もある。また、新規の 申し込みなどの際、昔入所されていたご家 族のご紹介という形の方も見られた。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努 めている。困難な場合は、本人本位に検討している	外での作業や、お金をおろしたり、病院への 受診を話し合ったり、希望を聞きながら対応 出来ている。外出、外泊も柔軟に対応してい る。	職員は利用者の生活歴をアセスメントや家族から 聞き、把握している。居室や戸外など利用者1対 1になる場面を多く持ち、思いを聞き取っている。コ ミュニケーションが難しい時は表情や態度から推し 量る他、家族へ聞くなどして思いに沿うよう努めて いる。聞き取った情報は申し送りに記載し、共有 し、介護計画へ繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、こ れまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	性格的に、きれい好きであったり、お世話好 きであったり、その人その人の個性を大事 に日々の生活をサポートしている。食事面 も、好きなもの、嫌いなものに対応し、その 時その時のメニューの変更も行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等 の現状の把握に努めている	自由に過ごせる方には、集団生活のリズム を強要せず、判断が難しい方は、出来る範 囲で、選択肢を与えて生活して頂いている。 出来る範囲も見極めて、サービスを行ってい る。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方につい て、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの 意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作 成している	本人の自由になるべく応えられるよう、金銭 面、外出面では、家族と相談したりもした。 また、往診や、島内施設などへお伺いする 際など、対応して頂けるよう、話をしたりして いる。	毎月のカンファレンス、3ヶ月毎のモニタリングを職員 参加で実施し利用者の状況を確認している。必要 な時は都度見直しを行っている。家族の要望は 受診時や面会時、電話などで聞き取り、主治医や 看護師の意見等取り入れ、本人本位の介護計画 の作成に努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別 記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介 護計画の見直しに活かしている	日々のケアに関して、毎日ケア記録を箇条 書きにして、毎月のカンファレンスで話し 合っている。また、介護計画の見直しにも役 立っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	一人暮らしの方の、買い物、支払いなどには、施設側で本人と一緒に同行して活動している。また、施設のルールにとらわれることなく、どうやったら出来るのか？という視点で考え方を進めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の町づくり協議会とは、災害時などお互いに協力体制を確立できた。芋ほりの畑や、施設で食べるお米なども地元から購入している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	施設はかかりつけ医を利用しており、協力医を優先しているのではない。看護師をこの春から配置し、連携や、家族とのやりとりがよりスムーズに行えている。	かかりつけ医を継続している。今年度から看護師を配置し通院同行しており、受診後は電話やLINEを活用し結果を家族に報告している。また、病院で待ち合わせ、家族が同行することもある。夜間緊急時は2つの医療機関で対応しており、契約時に通院歴等により、どちらか定めるなど、適切な医療を受けられるように支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師の配置により、体調不良面での対応や、夜間の緊急時の対応など、以前より安心して対応できるようになった。受診も看護師の目線で支援できるようになった。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、入院に際して相談をしたり、退院に関しても連携室から毎回必ず連絡を頂き、カンファレンスに参加して退院をサポートしている。広報誌で施設の様子をお伝えしたり、よりよい関係が築けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や、終末期に関しては、協力医の不在から施設で最期まで看取することは出来ない旨をお伝えしている。ただ、施設で見れる範囲は最後まで介護し、病的に対応できなくなったら入院という形でご理解いただいている。	事業所は看取り支援を行わない方針である。重度化に関する指針には看取り介護体制が取れない条件を明確に掲載し、契約時に家族に説明して同意を得ている。利用継続が困難になった場合は、家族の意向に沿えるよう、かかりつけ医を交えて他施設への移行や医療機関への入院などを説明し、出来る限り協力を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応の確認や、マニュアルもあり、看護師の導入で以前より安心できている。今後の課題としてはAEDや、心肺蘇生、のどに詰めた時などの訓練を希望したいとこえがあがった。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている。	毎年、夜間、昼間の火災に関して訓練は、地域の消防団、消防署の立ち合いの元実施している。また、原発の避難先、ルート、水害時の避難先なども確認、防災品のチェックなども行っている。	年2回の総合訓練の内、5月には夜間帯に消防署、消防団が立会い、スモークマシンを活用している。11月は日中に併設通所事業所との合同訓練で連携体制を確認している。また、5月には原発避難訓練にも取り組んでいる。備蓄は敷地内の備蓄倉庫に整備しているが、非常持ち出し品については、迅速な避難において課題がある。	利用者が迅速に避難できることを第一として、緊急避難時用の利用者の情報は持ち出し書類として、整備していくことが望まれる。今後の検討・取組に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	基本的には出来ているが、たまに、入室時の声かけや、排泄介助時にドアがちゃんとしていない所を見かけたことがあった。徹底していきたい。	事業所は介護度が低く、比較的元気な利用者が多い。そのため、職員は親しみの中でもさん付けで呼ぶなど節度を保ち、「家族が横にいて不快に思わない会話」で支援するよう留意している。また人格を尊重し羞恥心やプライバシーを損ねない対応にも努めている。ただし、契約時、利用者の写真掲載の同意は口頭のみに残っている。	利用者の個人情報保護の観点から、事業所だよりに掲載する写真使用について、文書での同意を得ることが望まれる。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活では、衣服の選択や、食事のメニューの決定などがある。また、外泊や、金銭、受診、行きたいところなど、それぞれの希望に添うように援助している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日常の生活としては、YouTubeで好きな番組を見たり、間違い探しや、色塗り、他の方のお世話や、職員の手伝いなど施設としてのスケジュールはないので、面々に過ごされていることが多い。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時の着替えの洋服はもとより、入浴後の化粧水や、乳液なども、指定のものをつけたり、なくなれば職員に買ってきてほしいと頼まれる方もいたりしています。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事面は特に自由で、制限も設けることなく、生ものや、その時期ならではの食べ物（おせち、恵方巻、うに、タラの芽、タケノコ、うなぎ、BBQ、栗、芋、干し柿、ケーキ、アイス等）も好き好き提供している。	献立は、職員が利用者の希望を取り入れ作成し、食べやすい形状に調理している。利用者も野菜切りや味付けなど手伝っている。管理者が採ってきた雲丹の殻を利用者が割った「うに丼」や郷土料理、庭でのランチ、職員手作りの花見弁当、さんまバーベキューなど、食事は人生の楽しみと位置づけ、全員で楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べる量は、栄養面や体重に合わせてDrと相談し足りない分は、栄養補助食などで調整している。水分は、一日に飲んだ量をこちらで把握し、管理している。お茶だけでなく、ジュースや、ヨーグルト、コーヒー等色々選んでもらっている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは出来る方は自分でして頂き、不十分な所だけ介助している。口腔ケアスポンジや、クルリーナブラシなどの使用もあり、義歯の合わなくなった方には、訪問歯科で対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄は個々に行ける方は、行っているが、それでも間に合わない方もいるので、その方はこちらで声掛けし促して確認している。介助も出来る範囲で自己にてして頂き、一人一人介助量を調整している。	排泄チェック表を付け、利用者の排泄リズムを共有し、トイレでの座位排泄を基本とした支援を行っている。気持ちよく排泄が出来るように、夜間使用のポータブルトイレは都度洗浄し、また、排泄状況に合った介助方法や排泄用具を検討し、自立支援に努めている。パッドの種類の検討やおむつからリハビリパンツへの改善事例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の方だけではなく、繊維質の多い物や、水分、ヨーグルトなどを意識して提供し、自然排泄に努めることがある。それでも便秘の方はいっしょに、医師と相談して、薬の使用を、頻度、量を調整しながら行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的には入浴日が決まっているが、イベントや、受診、面会などその日の都合に合わせて柔軟に対応している。夏場日曜日に希望者を入浴する計画も立てたが、この夏は希望はなかった。退院後に入りたいという希望はあり、入浴を行ったことはある。	入浴は週2回を基本とし、臨機応変に本人の希望に沿って支援している。気分や体調で入浴拒否の時は無理強いせず、時間や日を変えて入浴を促している。同性介助や好みのシャンプー類の持ち込みに対応し、湯は一人ずつ張り替えている。また、ゆず湯など入浴を楽しむ工夫に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各個人は個室のために、部屋で休まれたり、TVを見ながらソファで休まれたりしている。午前中は基本皆様起きて活動される方が多いと思われる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	眠剤、便秘薬などは把握できているが、すべてを全職員が把握しているとは言えないかもしれない。周知は今後の課題とし看護師と相談しながらすすめていきたい。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	活動は、日々それぞれ面々に行っており、草取り、お世話、食事、掃除、洗濯たみと様々である。食べたいものの訴えや、外に出たの気分転換の訴えなど、その都度話に上がると、取り入れて実行できる範囲で行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	美容室、お金をおろす、一時的な家への外出など、ここ最近は訴えが多く聞かれ、その都度対応できている。4月からデートプランの実施の許可もあり、さらに柔軟に対応していけそうである	ミカン狩りや芋掘り、家族に参加を呼びかける季節の花見など全員で出掛けている。化粧品や菓子などの買い物の希望にも対応している。個別支援の“デートプラン”では、墓参りや自宅など本人の希望する外出を支援している。海に出掛け、海水に触れたり、島内巡りを楽しむなど、コロナ禍の中でも積極的に外出支援を行っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入所時にお小遣いとして預かっているお金から、自由に本人のために使わせて頂いている。また、自己管理させる方もいて、おろしに行きたいとの訴えもある。化粧品の購入なども自由に行えている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族の兄弟からよく電話がある方がいたり、携帯電話の所持も自由なので、携帯で毎日電話がかかってくる方もいらっしゃる状況である。手紙も年賀状であったり、娘様からの定期的な手紙だったり、食べ物だったり、よく届いたりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設内は明るく、自然な光が入りやすい作りになっている。眺めもよく、海や船、飛行機など視界に入ってくるものも多い。また、大きな窓からは景色も見え、季節感や天候の変化など感じやすくなっている。	リビングからは空と海の間に延びる水平線、飛行機、敷地内の花々が見渡せる。テレビでYouTubeスポーツ観戦を楽しんだり、食事作りや掃除、庭の草取りなどに取り組んだりしている他、職員と談話して楽しく自由に暮らす様子が窺える。廊下も広く手摺を備え、トイレまで利用者同士で手を引き移動しており、職員は見守り支援している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	デイルームの中でも、おおよそ、各個人個人がいる場所は決まっており、面々の距離感で過ごされている。また、各個室もあり、部屋で作業されることもある。人間関係もおおむね出来上がっていてご利用者様同士の会話も見られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は、特にしぼりなく自由にアレンジして頂いている。椅子や机を持ち込まれたり、寝具も面々使い慣れたものを持ち込まれたりしている。写真など飾られている部屋も見られ、一時的ではあったが干し柿をつるされてあったりもしていた。	自宅からの持ち込みは自由で、基本的に居室内での飲食も制限しておらず、ベッド横に菓子を置くなど自宅同様に暮らしている。脳トレ本や読書を楽しんだり、テレビを観て寛いでいる他、居室が隣同士の姉妹が互いに行き来している。敷地内の広い洗濯干し場を活用し定期的にシーツを洗い、盆年末は大掃除を加えるなど清潔な環境である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	引き戸であったり、スロープであったり、建物はそれなりに歩きやすい作りになっている。廊下も長く広いために、歩行練習もでき、良い訓練場になっている。		